

# こしえるびと

つむぐストーリー vol.119

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。  
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の  
メッセージをシリーズで紹介していく。

## 地域に根差した農業を目指して

川崎町薄衣 菅原哲さん

### リンゴ栽培の道へ

山あいの小高い丘の上にあるリンゴ園。秋のまぶしい日差しを浴びて真っ赤に色付いたリンゴが輝く。菅原哲さんは、リンゴ一つ一つ当たりを確認しながら着色管理作業を進める。

菅原家では、祖父の正一さんがリンゴ園の経営を始め、父の博美さんは会社勤め、母の君代さんがリンゴ園を手伝っていた。農業を継ぐことを考えていなかった哲さんは、卒業後は就職するつもりで高校は普通科に進学。授業の一環で、製造業の現場を職場体験したときに「自分には合わない」と感じた。そこで家業でもあるリンゴ栽培をしようと県立農業大学校へ進み、果樹栽培の基礎知識を学んだ。卒業後は奥州市江刺のリンゴ農家で1年間の研修を積み、2007年に就農し、リンゴ栽培の道を歩み始めた。

### 新たな品目への挑戦

就農すると、正一さんと同年代の生産者に交じって指導会などに積極的に参加したが、若手の生産者はいなかったと当時を振り返る。「リンゴ栽培のやりがいは収穫期に成果が目に見えること」。毎年反省点や課題を見だし、栽培に取り組んでいる。

近年は気候変動などでリンゴが栽培しにくい環境になっていると感じている。特に赤いわせ品種は、高温が続くと着色が遅れるため、哲さんはリンゴの品種構成を見直している他、モモへの品目転換にも着手している。モモは、JA果樹部会の担い手グループでも導入に取り組んでおり、県内の若手生産者との交流もある。気候変動は病害の発生にも影響し、「古い樹が病気にかかりやすく、改植の他、防除体系も変える必要がある」と対策を練っている。

### 地域に根差した農業のために

就農した年にJA川崎青年部が再始動し、哲さんも加入した。以来、JAの青年部活動に積極的に参加している。30歳の時にJA川崎青年部の部長を任され、5年前からはJA青年部協議会副会長を務める。また、岩手県農協青年組織協議会副会長も務め、県内外で開催される催しやSNSでの情報発信など、活動の盛り上げ役も担う。JA青年部協議会では、児童養護施設への野菜提供の他、軽トラ市、カレンダー作成に取り組む。いろいろな品目の生産者が集まるだけに「同じ世代の生産者との交流の場。仲間と組織活動のPRをしていきたい」と意気込んでいる。

「地域に根差したリンゴ栽培を通し、仲間を増やし、活気ある活動をしていきたい」。期待を胸に、哲さんの挑戦はまだ続く。



## PROFILE

**菅原 哲**さん (38)

Satoru Sugawara

川崎町薄衣

1986年川崎町薄衣生まれ。岩手県立農業大学校で果樹栽培を学び就農。就農と同時にJA青年部に加入し、現在、JA川崎青年部長、JA青年部協議会副会長、岩手県農協青年組織協議会副会長を務める。リンゴ1畝、モモ20畝、ギョウジャニンニク1畝、水稲20畝。両親、弟の4人暮らし。

